の頭骨収集に成功し，現在，詳細な研究をおこなっている。

3) 東南アジアの地史学的研究

野 上 裕 生

1976年11月1日より12月31日まで，おもにサラワク州において，第三紀の地史を検討した。また，日本人研究者の霊長類調査の可能性について，現地の当局者と折衝した。

4) 霊長類歯牙の組織学的研究

野 上 裕 生

霊長類歯牙の組織学的研究をおこなうために，各分類群の歯牙の収集と研究設備の充実をはかった。

5) 日本産ヤチネズミ類（ゲッ歯目）の分類学的研究

相 見 満

日本の哺乳動物相の現状とその成立過程を追求する一環として，最新世中期より現世までのヤチネズミ類の変遷を研究している。

6) 現生霊長類の比較形態学的研究

相 見 満

個体の成長過程を通じて種の形質特徴がいかに出現するかを，骨格をおもな対象として検討している。

7) 第三紀の食虫類，原猿類と有袋類の研究

瀬 戸 口 烈 司

ワイオミング州から産出する第三紀前期の豊富な資料をもとにして，哺乳類の適応放散について研究を進めている。また，日本各地の第三紀層を再検討し，比較資料の収集をこころみている。

総　　説

1) 江原昭善・渡辺直経（1976）：猿人。中央公論社，東京。

2) 野上裕生（1976）：先史への発掘。大陸書房，東京。

論　　文

1) 瀬戸口烈司（1977）：中生代哺乳類の進化と霊長類の進化。"今西博士古稀記念論文集2，"pp.95—129，中央公論社，東京。

学会発表その他

1) 生物現象における類縁性と系統の設定手順

江 原 昭 善

第36回日本動物心理学会特別講演（1976）

2) 霊長類およびヒトの爪のメラニン色素について

江原昭善・松本 真
H. Rothe

第30回日本人類学会・民族学会連合会（1976）

3) 真猿類の動物地理学的考察

相 見 満

第1回霊長類の系統・進化と周辺科学研究会（1977）

4) 哺乳類の生活様式の生物学的基礎

瀬 戸 口 烈 司

第1回霊長類系統・進化と周辺科学研究会　（1977）

5) 霊長類の性的二型—形態学的観点から

江 原 昭 善

第7回ホミニゼーション研究会（1977）

幸島野外観察施設

岩本光雄（施設長・兼）・河合雅雄
（施設長事務取扱・兼）・森　明雄

幸島をめぐる観光開発や観光客の増大によるフィールド維持の困難さは持続している。この問題は基本的には，国による管理体制をとることが最も望ましい解決法であろう。

51年2月，幸島と本土の間の海域に砂が堆積し，干潮時には陸続きになる現象が起った。このため観光客は自由に渡島でき，またサルが観光客の餌にひかれて本土に渡る可能性ができており，その管理に大きな努力を注いだ。幸い，夏の台風で堆積した砂が流れ，陸と島が離れたが，52年3月再び島が陸続きになり始めた。

なお，51年11月より岩本施設長の海外出張に伴ない，51年11月18日～52年1月22日まで河合雅雄が施設長事務取扱となった。

≪群れの状況≫

幸島に生息するニホンザルは，94頭（52年3月現在）である。今年度はリーダー交代があった。その過程は，52年11月，第3位のオス・エイが行方不明となった。12月末に突然第4位オスのナベが第1位オスのセムシよりも優位になった。52年1月初めに第2位オスのノミが姿を消し，続いて2月セムシも姿を消した。その結果4位のナベがリーダーとなり，2位はクモとなり，以前から群れのメンバーであるオトナオスが，少なくなったが，それと同時に，数頭のソリタリーオスが群れに加入した。これらのソリタリーオスが群れのメンバーとして定着するには，ある程度の期間が必要である。

研 究 概 要

1) 幸島のサルの生態学的社会学的研究

森　明 雄・三戸サツエ
冠地富士男・山口直嗣

前年度からの継続で，ポピュレーション動態に関する諸資料を収集している。毎月1回ほぼ全個体の体重測定を行っている。社会学的研究については，通年の変化

や，個々のトピックについて調べている。

2) 飼育ニホンザルに対する自然食の給餌実験

森　明雄・山口直嗣・冠地富士男

ニホンザルを飼育し，野外で採食することのわかっている食物を与え，摂食速度と摂食量及び食物の選択性等の生物経済学的研究を行った。

3) 内部寄生虫に関する研究

今田　勲（宮崎大）・森　明雄

内部寄生虫卵の季節変化を，毎月1回，個体毎に採糞することにより，定量的に調べた。

なお，51年度に本施設を利用した共同利用研究者は，菅原和孝（京大）である。その他長期滞在し，利用した研究者は，今田勲（宮崎大），山極寿一（京大），岩本俊孝（宮崎大）である。本年度は学部学生で，滞在し，フィールドワークの訓練を行う者が多かったのが特徴であった。

本年度に，本施設を訪問あるいは利用した研究者は，延べ300人である。

学　会　発　表

1) ニホンザルに対する自然食の給餌実験

森　明雄・山口直嗣・冠地富士男

第21回プリマーテス研究会（1977）

サル類保健飼育管理施設

千葉敏郎・松林清明

後藤俊二・松林伸子[1)]

昭和50年度におけるインド産アカゲザルの輸入状況の悪化は，51年度においてはやや緩和された。しかし，前年度の協議員会によって決定された自家繁殖態勢の充実強化と，外国産サルの輸入頭数削減の基本方針に基づき，51年度サル施設運営費によるサル購入頭数は僅かに29に留まった（第1表）。ちなみに，前年度における購入頭数は70である。これに対し，51年度科研費による購入頭数は48（前年度は23）である。すなわち，サル施設運営費による購入頭数と科研費によるそれとの比は，ここにおいて完全に逆転したことになる。このことは，最近数年間におけるサル施設運営費の伸び率が頭打ちの状態にあり，前年度比について見ればむしろ減額されていることとも大いに関連する。今後においても運営費の増額は全く期待し難いとすれば，また上述の科研費による購入頭数の増加の傾向が定常化するものと仮定すれば，それは本研究所全体の研究体制にとって，必ずしも好ましい結果を生ずるものではあるまい。

自家繁殖態勢の充実強化の基本方針としては，本研究所内に戸外グループケージを増設することに主眼が置かれ，そのための予算確保の努力が過年度に引き続きなされてきたが，今年度もまたその実現は見ずに終った。しかし，科研費による戸外グループケージ2棟の建設が現在進められつつあり，これの活用による成果の増進には，将来期待するものが少なくあるまい。

研究所内で使用されるニホンザルに関して言えば，すべて自家生産によることが最も望ましいことである。しかし，自家繁殖態勢が完全に整う迄は，当面所外からその供給を仰がねばならず，そのためには専門家による合理的な生態管理が適正に行なわれている野外放飼群あるいは野猿公園から，生体資料として恒常的に提供してもらい，これを有効適切に研究に供する方策を取らざるを得まい。

研　究　概　要

1) ニホンザルの精子形成のKinetics—野外群と室内群との比較

千　葉　敏　郎

前年に引き続き，上記両群における精子形成の季節変動を追及しているが，今年度は特に非繁殖期を中心として材料の採取および観察を行なった。それによれば，非繁殖期における野外群においては確かに精子形成機能の低下が認められるが，高令のものは若令のものに比し，その低下の度が小である傾向を示す。他方，室内で長期飼育されている高令のものにおいては，野外群における如き季節的変動は認め難いことが分った。

2) 室内飼育ニホンザルにおける精細胞の分裂パターン

千　葉　敏　郎

去勢によって得た精巣組織片，およびこれから分離した精細管標本（in toto もしくは縦断）を用い，特に精原細胞を中心に各世代精細胞の分裂パターンを定量的に追及している。

3) サル類精液の物理化学性状の比較検討

松　林　清　明

主としてcoagulationの生物学的意義を探る為，電気刺激による各種サルの精液採取とその性状分析に取り組んでいる。

4) 小型霊長類の実験動物化に関する研究

松　林　清　明

ワタボウシパンシュ（Saguinus oedipus），シルバーマーモセット（Callithrix argentatus）を用いて，生理的諸数値のデータを積み重ねると共に，実際の室内繁殖を行っている。尿中エストロジェン量の季節変動及び遺伝的変異性の定量についても調べている。

5) ニホンザル野外群の健康調査

松林清明・千葉敏郎

志賀C群についての総合捕獲調査に於て，臨床班とし

1) 教務職員